

明治期の群馬県藤岡地区におけるキリスト教と養蚕業の関係 — 緑野教会と高山社蚕業学校を中心に —

荻野基行

東京福祉大学 社会福祉学部(伊勢崎キャンパス)

〒372-0831 群馬県伊勢崎市山王町2020-1

(2010年5月6日受理)

抄録:明治期、群馬県にキリスト教が拡大した背景には欧米諸国との蚕糸を中心とする取引による影響が大きい。また新島襄の影響により県西部を中心に組合教会が多く設立されたが、この地域は組合製糸が盛んな土地でもあった。その中で藤岡地区には組合教会に属した緑野教会があり、養蚕関係では組合方式による高山社蚕業学校が存在した。両者は少なからぬ人的交流があり、高山社分教場当主の中には有力蚕種家や地域の政治家とともに信徒もいた。緑野教会創設期はこのような上昇的生産者によって支えられた。しかし多数の信徒が小生産者層であった農村教会にとって農繁期におけるキリスト教活動の減退や社会的にもキリスト教への理解が浅い時代であり、創設期は苦難の時期であった。研究対象は緑野教会の創設期を中心にそれを支えた人々と、高山社蚕業学校、特に分教場を対象に、文献をもとに研究した。
(別刷請求先:荻野基行)

キーワード:組合教会・組合製糸・緑野教会・高山社蚕業学校・分教場

緒言

明治期において、群馬県でキリスト教が広まった理由として大きく2つあげられる。

1つは蚕糸業(蚕種製造・養蚕・製糸)および織物業との関係である。群馬県は江戸時代以前よりそれらが盛えており、明治時代になり鎖国がとけると群馬の蚕糸(シルク)が外国に輸出されるようになった。そしてそれに携わった人々によって群馬県にはキリスト教が齎されることとなった。つまり養蚕糸業や製糸業、あるいは絹織物業が盛んな土壌がキリスト教を導きいれ、それに関わる者等によってキリスト教活動が支えられたと考えられる。

もう1つは地元安中藩出身の新島襄の影響が相当あったと考えられる。彼の教えにより安中教会が創設され、その後、安中教会の教派である組合教会が群馬県西部(以下、西毛地域と記す)を中心に作られた。この組合教会は明治時代における群馬県下の教会の多勢を占めることとなった。

このような明治時代を中心とする群馬県内の蚕糸業および織物業と、キリスト教や教会との関係については、工藤(1959)、大濱(1979)、一倉(1965)、隅谷(1968)、星野(1987)、森岡(2005)等による多くの先行研究がある。明治時代の西毛地域に限定すれば、安中・原市教会の活動地

域である碓氷安中地域には碓氷社があり、また甘楽教会の活動地域である甘楽富岡地域には、甘楽社、下仁田社という、南三社といわれる組合製糸が栄えた地域であったことから、上記の先行研究ではこれら西毛地域における蚕糸業とキリスト教教会との関連性を研究したものが少なくない。

一方で、安中教会等と同じ西毛地域にあり、かつ同じ組合教会として藤岡に創設された緑野教会に関する先行研究は決して多くない。またこの藤岡には養蚕業では、養蚕改良高山社・私立甲種高山社蚕業学校が、明治期には緑野教会に隣接して存在した。西毛地域と同様、藤岡地区においても緑野教会と高山社は何らかの関係性があったのではないかと思われるが、このことに関する先行研究はみつかることができなかった。

そこで本稿では、明治時代に群馬県でキリスト教が広まっていった要因を養蚕業の発展と新島襄の影響から述べ、次に、西毛地域を中心とする組合製糸と組合教会の関連性、緑野教会の創設期に携わった人々やこの地区の養蚕業を支えた人々の活躍等から、藤岡地区における緑野教会と高山社蚕業学校の関係性を明らかにすることを目的とした本研究の結果を紹介し、最後に、養蚕地帯におけるキリスト教活動の苦悩を当時の情勢を含めて考察した。

研究対象と方法

研究対象は、緑野教会の歴史、特に創設期を中心にそれを支えた人々と、高山社蚕業学校、特に分教場で、研究方法は文献研究を主とした。

結果と考察

1. 群馬県における養蚕・製糸業の歴史とキリスト教の関係

群馬県における蚕糸業の歴史は古く、萩原、山田(1955; p10)によると、文献的初見は『続日本紀』とされている。その巻六、和銅七年正月甲申條には、

令相模。常陸。上野。武蔵。下野五国。

始輪絶調。但欲輪布者許之。

とあって、上野外東国諸国の調が714(和銅7)年以降、従来の布に代って一部絶(あしぎぬ)が併進されるに至ったことが記されている。賦役令によれば、絶は「細為絹也。麤為絶也。」とあって、絹に比べて質が劣ったものであるという。また江戸時代の絹織産業については、質においては桐生を中心とした東上州の仁田山絹が、西陣と対等に名声をあげ、量においては藤岡を中心とした日野絹が天下に誇るだけの生産をして、「ともに全国の商品の名にそむかない地位を確立していた」と記されている。(加藤・井草・茂木, 1954; p338)

群馬県の織物産業はそれ単体で発展してきた訳ではない。織物のもととなる糸(生糸)をつくる製糸業、糸をつくるために蚕を育てる養蚕業や蚕種業、蚕を育てるためにつくる桑樹繁殖法や蚕種製造業等も同時に進化・発展していった。

特に群馬県の養蚕業については江戸時代より安定した質の高い蚕を育てるための研究がされてきた。例えば、江戸時代には馬場重久(現在の吉岡町出身)の『蚕養育手鑑』(1717)や吉田芝溪(現在の渋川市出身)の『養蚕須知』(1794)等の刊行、あるいは明治時代に入ると永井紺周郎・いと夫妻(現在の片品村出身)による「いぶし飼い」の考案等にみることができる。丸山(1992; p232-233)が「養蚕技術が進み、生糸の質が向上して、国内需要も次第に増加した。そんな時に外国貿易が始まったのである。」と記しているように、1859(安政6)年の横浜港開港に伴い、群馬の絹織物や生糸が世界へ輸出されることとなった。この頃群馬県からは仲居屋重兵衛(現在の嬭恋村出身)が横浜へ出店し、生糸等の売込商として活躍している。また1876(明治10)年には黒保根(現在の桐生市黒保根町)出身の星野長太郎の実弟である新井領一郎が生糸を直輸出し、1879(明治12)年には島村(現在の伊勢崎市境島村)の田島弥平らが蚕

種直売のためイタリアへ出発している。このように外国人と交渉することによって、群馬県にはキリスト教が浸透していくこととなった。その理由として丸山(1992; p234)は「外国貿易というのは、外国人相手の交渉であるから、第一に言葉が通じなければならない。(中略)英語の学習のためにキリスト教会に出入りし、キリスト教に入信することは自然のなりゆきであった。」と記している。上記の星野長太郎や田島弥平はキリスト教徒であり、星野とともに改良座繰り結社「精糸原社」を前橋に結成した深沢雄象はギリシャ正教徒であった。高崎の西群馬教会の設立に尽力した星野光多は直接養蚕業や製糸業に携わらなかったが、彼の父は横浜で生糸貿易業「星野屋」を営んでいた沼田出身の星野宗七であり、次男の光多は、横浜にいた1874(明治7)年に受洗(プロテスタント)し、五女のあいも1877(明治11)年に受洗し、後に津田塾大学の学長となった。また船津伝次平の弟子であり1927(昭和2)年に組合製糸「群馬社」を創設した富士見(現在の前橋市富士見町)出身の桑島定助もキリスト教徒であった。

明治時代における群馬県内のキリスト教の受容と拡大は、全国的にみても特徴的であったといえる。『統計集誌』第82号(1888(明治21)年6月)による明治前期の府県別キリスト教信徒数をみると、東京5267人、大阪1678人、神奈川1423人、兵庫1026人について群馬は第5位、985人に上っていた(図)^{註1)}。

上位4府県について森岡(2005; p117)が「大都市・開港場を擁し、欧米の新文化に最も早く接触したばかりでなく、これを求める比較的厚い社会層を含んでいた」と記している通り、東京・大阪・神奈川・兵庫にキリスト教徒が多いということについては理解できよう。大都市もなく海港もない群馬県において、なぜこれまでキリスト教徒数が多かったのかについて丸山(1992; p212)は、「これは新しい文化を吸収しようとする意欲によるものと考えられよう。養蚕製糸という産業にたずさわる指導者層の入信によるものが多く、この養蚕製糸業ほどのような山村にも普及し、熱心な信者がいた。」と記し、森岡(2005; p117)は「これら(養蚕・蚕種製造・製糸)に携わる上昇的生産者層が地域枠を超出した幅広い経済活動によって開かれた眼でキリスト教に接し、その社会的影響力によって地域から信徒を掘り起こすのを助け、その経済力をもって教会堂を設立し、教会を維持したのであった。」と解している。

また隅谷(1968; p577)は、養蚕・蚕種と製糸業・織物業にわたる上で、群馬県下の製糸業とキリスト教の関係は、「製糸が養蚕から分離し、マニユファクチュアとして発展した形態では、一般に不幸に終わった。」と記し、桐生地域を中心とする織物業については「小マニユファクチュアであっ

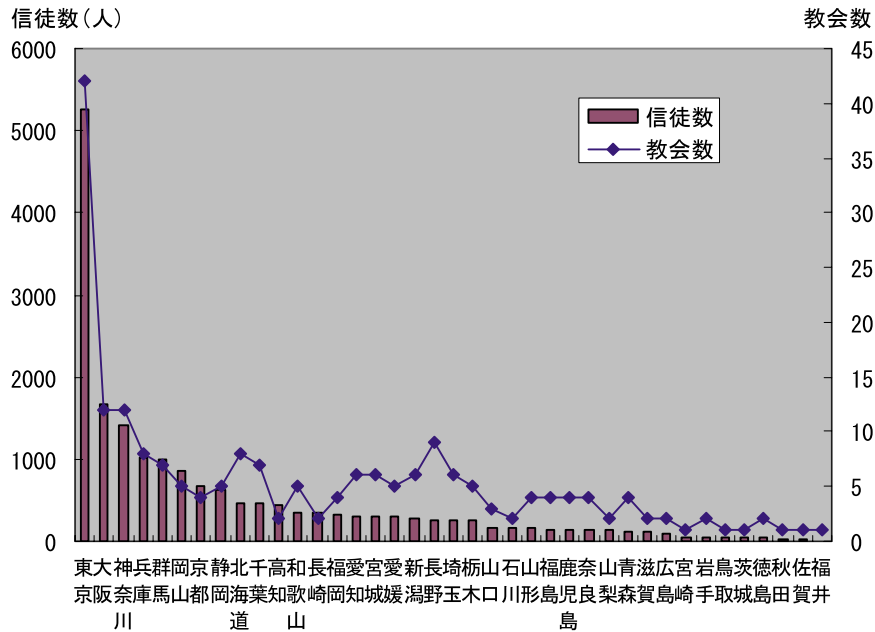


図. 明治前期における府県別キリスト教会数と信徒数
『統計集誌』82号 明治21年6月) 拠『群馬県史資料編』22巻より著者グラフ化

て、資金が零細である上に、奢侈品として景気の変動に敏感で極めて投機的な事業であったので盛衰が甚しく、長く信徒として教会員の責任を全うすることが困難であった。」と解している(隅谷, 1968; p578)。

いずれにしても森岡(2005; p117)が記しているように、「幕末以来群馬の代表的産業に成長した蚕糸業(養蚕・蚕種製造・製糸)および織物業がキリスト教の受容と密接な関連をもった」のは事実であろう。それゆえ明治時代において群馬県でキリスト教が受容され拡大していったのは、明治時代以前から養蚕・蚕種製造・製糸および織物業が盛んな土壌であり、開国後に欧米諸国と蚕種や蚕糸等の取引によりキリスト教が持ち込まれ、それに関わる者等によってキリスト教活動が支えられたことが一要因と考えられる。

2. 新島襄と組合教会

もう一つ群馬県におけるキリスト教布教に大きな影響を与えたのが、同志社大学の創設者としても有名な新島襄の存在である。新島はアメリカからの帰国後まもない1874(明治7)年11月と、1878(明治11)年3月に安中を訪問している。2回目の訪問では、男子16名、女子14名に授洗しており、その中には廃娼運動に尽力した湯浅治郎とその妻茂登子も含まれていた。そして安中教会は日本で最初に日本人によるキリスト教会として創設された。

この安中教会は、アメリカン・ボードの流れをうけ創立されたが、創建期の活動について森岡(2005; p129)は「草創期において同志社の神学生が伝道のために果たした役割

は実に大きかった。同志社神学生の貢献は日本基督伝道会社の活動を担うものとして、安中教会ばかりでなく初期の組合教会全般についてみられたのである。」と記している。日本基督伝道会社は「会衆制諸教会が開拓伝道を協力して推進するために」、1878(明治11)年1月に結成された(森岡, 2005; p390)。森岡(2005; p391)の研究によると、1886(明治20)年度の日本基督伝道会社の事業として、「熊本県八代、奈良、福井県敦賀、東京、群馬県藤岡、同原市、福島など八カ所へ伝道者を派遣し、その経費を負担した。」と記されており、これにより藤岡では日本組合教会緑野教会が設立されることとなった。

日本基督伝道会社結成以後の教会数、牧師等伝道者および信徒の人数の激増により、個別教会の独立自治を重視する会衆制諸教会も連絡協同をより密にする必要が痛感され、1886(明治19)年に日本組合教会が結成された(森岡, 2005; p390)。その体制について森岡(2005; p394)は「組織としては個別教会—地方組合部会—組合教会、意思決定機関としては教会総会—地方会—組合総会、執行機関としては教会役員—部会議長・事務委員—組合教会事務委員という三層構造であるが、実態は個別教会にあり、組合教会もまた地方組合部会も個別教会の内治に干渉するものではない。」と記している。つまり「日本組合教会は、個別教会の独立自治を重んずる教派的環境」であった(森岡, 2005; p396)。

明治20年末における群馬県内の教会は、組合教会が4、一致教会・美以教会・独立教会がそれぞれ1つの計7教会で

あった(表1)。大濱(1979; p111)は「独立の西群馬教会も1888(明治21)年に組合派へ加入するのみにみられるように、組合教会の圧倒的影響下にあった。いわば、群馬県は東日本における最初の組合教会が設立された県であるのみか、組合教会の東日本における最大の拠点としてプロテスタント教界の最も有力なる県にほかならない。」と、当時の群馬県下における組合教会の影響力の大きさを指摘している。

3. 組合教会と組合製糸

工藤(1959)は、明治時代の群馬県内における蚕糸業および織物業とキリスト教派の関連について、「組合教会による養蚕・製糸地帯」、「長老派による機業地帯」、「メソヂスト派による蚕種製造地帯」という分類をしている。明治20年代末、群馬県内で組合教会があった地域は、前橋、高崎、安中、富岡、そして藤岡であり、これらの地域は蚕糸業が盛んであった。その中でも碓氷・安中、甘楽・富岡地域では、組合製糸による甘楽社(1880(明治13)年)、碓氷社(1882(明治15)年)、下仁田社(1893(明治26)年)のいわゆる南三社が設立され、群馬県の近代蚕糸業を牽引したといつてよい。組合製糸について藤岡(2008; p14)は、「機械製糸ではなく各戸の改良座繰り製糸を基本とし、組合傘下の養蚕農家の出資と出荷した繭や生糸の量に応じた収益の分配の公平化を図ろうとしていたものである。」と説明している。その上で「単に分配のみならず生産の諸改革、研究開発にも腐心し切磋琢磨して生産に励み、それぞれに秀逸なる特産品を生み出し相応の経済力を得る」ことにより、各養蚕農家の経済的自立を図ったものと考えている。つまり西毛地域は「組合製糸」と「組合教会」の「組合」という共通キーワードが浮上してくるのである。

では緑野教会がある藤岡地域はどうであったか。上記の碓氷・安中、甘楽・富岡地域と同様に多野・藤岡地域も西毛地域に位置する。そして安中教会や原市教会、甘楽第一教会と同様に、緑野教会も組合教会としてスタートした^{注2)}。

表1. 明治20年代末の群馬県内の主な教会

名称	建設年月	所在地	教会主任者	教派
前橋教会	明治19年10月	前橋市紺屋町	不破唯次郎	組合
西群馬教会	明治17年5月	高崎市宮本町	星野 光多	独立
甘楽第一基督教会	明治17年2月	北甘楽郡富岡城町	茂野 衛	組合
安中教会	明治11年3月	碓氷郡安中町	杉田 潮	組合
原市教会	明治19年10月	碓氷郡原市村	新原 俊秀	組合
桐生基督一致教会	明治21年1月	山田郡桐生新町	—	一致
島村基督教会	明治19年7月	佐波郡島村新地	小森谷常吉	美以
緑野教会	明治22年4月	緑野郡藤岡町	茂木平三郎	組合

緑野教会以外は『基督教新聞』第260号から引用

一方製糸業においては多野郡上大塚村(現在の藤岡市上大塚)に組合製糸である緑野精糸社があった。また、後述する高山社は養蚕改良組合であり、高山社蚕業学校は組合方式で運営されていた。

隅谷(1968; p575-576)は群馬県における養蚕業とキリスト教の結びつきについて、①キリスト教会が基盤とした養蚕農家は、上層といっても多くは3、4町歩の小生産者層であり、地主的・寄生的な性格は極めて微弱で、日本資本主義の展開と結びついて、小商品生産を基底として上昇しつつあった社会層であった。②養蚕経営の特色は、技術的ないし経営的に新しい方法を打ち立てることに指導的な役割を演じており、上昇の小生産者層の生産力の積極的担い手となっていた、と分析している。その上で「群馬蚕糸業の一特色をなし、明治期の日本蚕糸業に大きな足跡を残した組合製糸が、キリスト教会が根をおろした群馬県西部を中心に組織され、碓氷社や高山社とキリスト教徒との関係がかなり緊密であったことは、見落されてはならない。」と記している。南三社をはじめとする組合製糸は、共同の揚げ返しや販売を通して養蚕農家の収入の安定と自立をめざした。高山社は組合製糸ではないが、高山長五郎が考案した清温育を全国の養蚕農家へ教授することにより、各養蚕農家の収入の安定と自立をめざしたところは注目すべき点である。

4. 高山社蚕業学校と緑野教会

藤岡地区の養蚕業の歴史を紐解く時、高山長五郎と町田菊次郎、そして高山社と高山社蚕業学校を外すことはできない。

高山長五郎は、1883(明治16)年に高山養蚕組合の設立を群馬県に申請し、翌1884(明治17)年には養蚕伝習所の性格を強めるため、養蚕改良高山社組合を、彼の生地である緑野郡高山村(現在の藤岡市高山)に設立した。その後指導する養蚕農家の増加や、高山は交通の便がよくなかったことなどから、1885(明治18)年から事務所と伝習所を藤

岡町(現在の藤岡市相生町)に移転する工事を始めた。しかし移転の前年となる1886(明治19)年12月10日、高山長五郎は満56歳で他界した。後任に副社長であった町田菊次郎が36歳の若さで社長となり、その後更に発展していった。1901(明治34)年4月に私立甲種高山社蚕業学校が開校し、「清温育」を全国に広めていった。甲種とは旧制中学卒業と兵役免除の資格をもち、その当時甲種養蚕学校は全国で唯一であった。初代校長には町田菊次郎が就任した。星野(1987; p137)によると、高山社が藤岡町に移転してきたことにより、「全国より多くの伝修生が集い、人事の交流が盛となり文化の導入も早くからあった」という。

高山社蚕業学校設立の目的は、「本校ハ獨立自營ノ良農ヲ養成スルヲ以テ教養ノ主義トシテ卒業ノ上ハ中堅國民タルノ素養ヲ與ヘ又農民トシテ必要ナル知識ヲ得セシムルト共ニ必ス完全ニ蠶養ヲ自營シ得ルノ技能ヲ得セシメント期ス」と、養蚕農家の自活・自営を図ることとしていた。つまりそれまで各養蚕農家が苦悩してきた養蚕方法に換えて、卒業生や授業員から清温育の技法を取り入れることにより、その生産を安定・向上させ、各養蚕農家の自活・自営を図ったと考えられる。また学校経営の費用は、設立当時より、生徒からの授業料よりも高山社から組合費として支払われる収入の方が大きかった。その組合費の中心は、授業員といわれた養蚕教師が、派遣地で受ける給料の100分の15を社に収める義務金と、本校の附属として別科生を養成していた分教場が、その収入の100分の15を社に収める義務金とであった(石田, 1974; p529-530)。このシステムは分教場である養蚕農家にとっても有益であった。

分教場とは「授業員の中から資格のあるものを選び、それぞれ自宅で伝習を受けさせた」、いわゆる実習所であり、群馬県を中心に埼玉県、千葉県にも設置された(石田, 1976; p532)。群馬県内では地元多野郡が最も多く8割以上を占めていた。それを町村別でみると、高山長五郎の出身地である美九里村が最も多く、次いで藤岡地区北部に位置する小野村や新町と続く(表2)。分教場には別科生といわれる学生が住み込みで養蚕実習を受けた。この場合、賄は分教場で持ったが労賃は無償であったため、分教場経営者は多くの労賃を費すことなく養蚕飼育、蚕種製造などを行なうことができた(石田, 1974; p638)。高山社蚕業学校はこの分教場制度とともに授業員を全国に派遣して養蚕農家に養蚕技法を教授したことによりその名は全国に知れ渡り、日本を代表する養蚕学校となっていったのである。

ほぼ時を同じくして、この藤岡地区で最も古い歴史をもつ緑野教会は、1885(明治18)年10月、甘楽第一基督教会(現在の甘楽教会)の伝道師茂木平三郎がこの地に福音の種をまこうとして藤岡に来たことに始まった(緑野教会創立百

表2. 明治35年度私立甲種高山社蚕業学校並分教場

群馬県	多野郡	藤岡町	3
		神流村	1
		小野村	9
		美土里村	5
		美九里村	12
		平井村	3
		日野村	3
		新町	9
		吉井町	3
		入野村	2
		中里村	2
		神川村	2
	小計	54	
	群馬郡		4
北甘楽郡		1	
佐波郡		4	
碓氷郡		1	
埼玉県	秩父郡		1
	児玉郡		1
千葉県	長生郡		2
計			68

(「明治38年度私立甲種高山社蚕業学校並分教場」、藤岡市所蔵資料より作成)

出典:群馬県藤岡市教育委員会、高山社を考える会、藤岡市観光協会編集・発行(2009):高山社跡概要調査報告書, p15.

周年記念誌編纂委員会, 1990; p71)。森岡(2005; p148-149)によると、茂木は安中教会員の古着商茂木一郎の養嗣子であり、甘楽第一教会は安中教会を母胎として産み出された教会であった。

最初茂木は、藤岡町六丁目辺りの民家を借り、講義所を設けて伝道を始め(星野, 1987; p138)、さらに多胡郡深沢村(現在の高崎市吉井町入野)の県会議員新井捨十郎の紹介で藤岡の濱田源蔵を頼って講義所を設けた。新井は西ヶ原養蚕伝習所の第一回卒業生であり、その後高山社蚕業学校の教師をしている(堀越, 1974; p758)。開設後は地域住民の反対運動がありながらも、1888(明治21)年には信徒が41名となり講義所が手狭になったことから、1889(明治22)年4月に新教会が設立された(緑野教会創立百周年記念誌編纂委員会, 1990; p74-75)。以下に教会建設に携わった人々を記す(表3)。

緑野教会第4代牧師大久保貞次郎の娘であり、日本キリスト教婦人矯風会の会頭として活躍した久布白落実は、高山社との位置関係について、「高山社と道を隔てて対決してキリスト教会の仮会堂があった。」(1973; p36)と記している。両者は隣接した立地関係ということもあり、人的交流がはかられていった。1902(明治35)年10月15日発行の『上毛教界月報第48号』(p11)によると、蚕業学校教頭

の河田力は札幌農学校出身で元来札幌日本基督教会に属して、緑野教会のためにできる限り尽力することを快諾したことや、名誉教頭で農学博士の大森順造も熱心なキリスト教徒であったとの記録が残されている。また蚕業学校の学生の中には緑野教会で受洗した者もいた。明治末期教会員だった塩谷氏によると、「その頃の緑野教会には藤岡中学と高山社との学生で混成されたグループがあり、楽しい交りを持っていた。」とある(緑野教会創立百周年記念誌編纂委員会, 1990; p199)。これらの記録により、明治から大正にかけて緑野教会には高山社に関係する人々の協力や交流が少なからずあったことを窺い知ることができる。しかし蚕業学校の学生達は元々全国から集まってきており、修学期間が終わると地元に戻ってしまった。そのことにより永続して緑野教会の活動に尽力することはなかったのではないかと考えられる。

5. 分教場とキリスト教徒

1901(明治34)年4月に甲種として開校した高山社蚕業学校はその後全国に名を馳せていくこととなる。その発展の柱となった一つに分教場制度をあげることができる。分教

場の中には有力な養蚕農家や地域の政治家もおり、緑野教会の信徒もいた(表4)。以下に主だった人物について記す。

大戸甚太郎は1838(天保9)年9月23日、藤岡で代々町年寄を務める大戸家の甚右衛門元貞と奈加の長男として誕生した(表5)。明治維新後の1873(明治6)年、藤岡学校の事務掛(後の保護役)となり、学校の運営や維持・管理に功績を残した。翌1874(明治7)年5月18日には熊谷県知事から藤岡の初代戸長に任命された。1875(明治8)年12月には北第十五大区(新町・藤岡・鬼石・万場・中里・上野)の区長となり、翌1876(明治9)年には第十九番中学区取締役に兼務した。一方で文武に優れ、藤森天山、大沼枕山に漢字、書、詩を学び親交を重ね、木村友三に神武一刀流を修めた。

このように地域の教育や振興に貢献した大戸は、1884(明治17)年に養蚕改良高山社に入社した。その2年後の1886(明治19)年12月3日、緑野教会にて不破唯次郎によって受洗した。この時48歳であった。その後、緑野教会および高山社の事務所や伝習所設立の際には私有地を寄贈している^{注3)}。

1893(明治26)年には大久保貞次郎と町田菊次郎の紹介により、秩父の宮前きし(喜志子)と再婚した。このときし

表3. 緑野教会建設に携わった人々

・大戸甚太郎	藤岡町	温厚篤学の詩人書家、建設に際し桑畑を快く貸与承諾す。
・濱田覚太郎	藤岡町	書籍店 青山学院出身
・飯塚 伊平	藤岡町	薬種店
・若山 忠三	藤岡町	米穀商 伝道の協力者
・高橋 安次	藤岡町	日向輝武氏の義兄
・小泉 はん	栗 須	キリストに救われ、時代の先端を行った婦人
・小泉信太郎	栗 須	後にハワイ移民の事に関与
・中島 惣七	中島村	篤農家、養蚕業を主とし、村長並びに碓氷社取締役をなせり。
・栗原兵次郎	中島村	時代に目覚めた篤農家、共愛女学校当時評議員
・中島 惣蔵	中島村	養蚕業生誕の育成に当たり、キリスト教の感化を及ぼす。
・原田庄三郎	中島村	竹細工業、熱心な信者九十三歳の天命を全うす。

出典:緑野教会創立百周年記念誌編纂委員会(編)(1990):緑野教会百年の歩み. 日本基督教団緑野教会, p74-75.

表4. 高山社分教場当主の主な緑野教会信徒

所在地	当主・開設者	生没年	受洗年月日	授洗者
藤岡町	大戸甚太郎	1838(天保9)年～ 1911(明治44)年	明治19年12月3日	不破唯次郎
小野村栗須	小泉信太郎	1865(慶応元)年～ 1945(昭和20)年	明治19年4月11日	海老名弾正
小野村中島	中島 惣七	不詳	明治21年3月10日	不破唯次郎
小野村中島	栗原文次郎	不詳	明治21年4月16日	デフォルスト (仙台より)
吉井町片山	横尾佐十郎	不詳	明治19年4月11日	海老名弾正

表5. 大戸甚太郎の略歴

1838(天保9)年9月23日	誕生
1873(明治6)年	藤岡学校の事務掛(後の保護役)となる。
1874(明治7)年5月18日	熊谷県知事から藤岡の初代戸長に任命される。
1875(明治8)年12月	北第十五大区(新町・藤岡・鬼石・万場・中里・上野)の区長となる。
1876(明治9)年	第十九番中学区取締役を兼務する。 群馬県第二課に勤務
1884(明治17)年	養蚕改良高山社に入社。
1886(明治19)年12月3日	緑野教会にて受洗。
1887(明治20)年	公務を退く。
1893(明治26)年	秩父神社宮司の長女、宮前きし(喜志子)と再婚。
1911(明治44)年11月23日	逝去

は既にキリスト教徒であり、結婚した1893(明治23)年11月に秩父講義所から緑野教会に転入している。埼玉県の秩父神社の宮司の長女として誕生した喜志子は、横浜の産婆講習所で産婆術を学び、卒業後、産婆学校の教師として助産の指導や研究を続けていたが、東京に移り、キリスト教徒として信仰を深めながら産婆を開業した。結婚後は自宅を開放し、新しい助産術や公衆衛生の普及に貢献した。1924(大正13)年6月には多野郡産婆協会を設立し初代会長としても活躍した(黒澤・飯塚, 2004; p102-103)。

小野村栗須の小泉信太郎は1865(慶応元)年、養蚕農家を営んでいた小泉又衛の長男として生まれた(表6)。母親の弟が町田菊次郎であったということもあり、高山社蚕業学校に入り、養蚕飼育を学んだ。そして1882(明治15)年、桐生で開かれた県下蚕業大会で養蚕業に関する所信を述べて注目された。また近くに住む高津仲次郎を中心とする自由党系の政治結社明巳会に参加するようになり、24歳のころには、地域の中心的人物となった(黒澤・飯塚, 2004; p20)。1889(明治22)年に渡米し、現地で生糸の消費流通状況や農商業などを6年間にわたり視察・研究した。そのかわらサンディエゴ婦人会に日本の養蚕業を伝えた(黒澤, 1976; p123)。帰国後の1897(明治30)年にはハワイにも視察にでかけている。1911(明治44)年と1914(大正3)年にはフィリピンに渡りマニラ麻を購入して、女性の副業を奨励したり、へちまや唐辛子の対米輸出の道を開き、新しい換金作物の開発など農村経済の安定のために努力を重ねた(黒澤・飯塚, 2004; p20-21)。また政治家としての顔をもち、1926(大正15)年と1937(昭和12)年から1945(昭和20)年までの3期9年間県議として在任し、藤岡、新町間の馬車鉄道の敷設や同胞融和事業の発展にも貢献した(塩沢, 1982; p191)。一方小泉の受洗は、1886(明治19)年4月11日緑野教会にて、海老名弾正によってであった。この時21歳であり、緑野教会の中でも最も早い受洗であった。

小泉は1900(明治33)年、キリスト教徒であった安藤たねと再婚した。たねは日本キリスト教婦人矯風会の理事(財務部長)として中央でも活躍するかわら、地元では藤岡幼稚園初代園長やみどり保育園の創立に尽力したのをはじめ、小野村母の会会長、方面委員・民生委員、小野村社会福祉協議会会長、多野郡連合婦人会や藤岡市社会福祉協議会の顧問を歴任するなど、幼児教育、児童保育、婦人活動、地域福祉事業等多方面にわたり活躍した。たねが初代園長となった藤岡幼稚園は緑野教会に隣接しており、また緑

表6. 小泉信太郎の略歴

1865(慶応元)年	誕生
1882(明治15)年	県下蚕業大会で養蚕業に関する所信を述べる。 政治結社「明巳会」参加
1886(明治19)年	緑野教会にて受洗(4月11日)
1889(明治22)年	渡米
1895(明治28)年	帰国
1897(明治30)年	ハワイへ渡る
1898(明治31)年	帰国
1900(明治33)年	安藤たねと再婚
1911(明治44)年	フィリピン群島でマニラ麻を大量購入
1914(大正3)年	フィリピン群島でマニラ麻を大量購入
1926(大正15)年	群馬県議会議員補欠選挙当選
1927(昭和2)年	群馬社設立 副社長就任
1931(昭和6)年	多野養蚕業組合創立 組合長就任
1934(昭和9)年	宮中紅葉山養蚕所拝観
1937(昭和12)年	群馬県議会議員補欠選挙当選
1939(昭和14)年	県議会議員選挙当選
1941(昭和16)年	群馬社退任
1943(昭和18)年	群馬県議会議員選挙当選
1945(昭和20)年	逝去

野教会はたねらが創立に尽力したみどり保育園の一角にある^{注4)}。また母であるはん(ハン)も信太郎に次いで緑野教会で受洗しており、キリスト教関係者の間で「上州の三女傑」として知られていた(相葉, 1971; p133)。

吉井町片山(現在の高崎市吉井町)の横尾佐十郎は弘化の頃より寺子屋を開き、いろは、今川、庭訓を教えていた(宮野, 1974; p713)。緑野教会では最も早い1886(明治19)年4月11日に、横尾は小泉信太郎と共に海老名弾正より受洗している。信太郎と共に受洗したのは、分教場当主としての繋がりがあつたのではないかと考えられる。

また第3代小野村村長の栗原文次郎や、同じく第5代村長であり碓氷社の取締役にもなった中島惣七も、緑野教会で受洗した分教場の当主であった。

上記以外の人物では教会建設に携わった藤岡町の飯塚平一や中島村の原田庄一郎も養蚕農家であり、地域の農業振興に尽力した神流村戸塚の中山重兵衛は1888(明治21)年4月16日に受洗している。このように、明治期の緑野教会の信徒には養蚕農家が多かった。また養蚕農家以外では、明治期の衆議院議員として普通選挙権の拡張等に尽力した藤岡の日向輝武が、1887(明治20)年1月3日、不破唯次郎によって緑野教会において受洗している^{注5)}。

前出の通り森岡(2005; p117)は、この当時の群馬県下における蚕糸業及び織物業とキリスト教の関連について、「これら(蚕糸業及び織物業)に携わる上昇的生産者層が地域枠を超出した幅広い経済的活動によって開かれた眼でキリスト教に接し、その社会的影響力によって地域から信徒を掘り起こすのを助け、その経済力をもって教会堂を設立し、教会を維持した」と記している。これを藤岡地域にあてはめてみるならば、大戸を始めとする上記の者は上昇的生産者に該当するのではないかと考える。また明治30年代の『上毛教界』をみると、大戸家や中島家、小泉家で頻りに集會が行われており、彼らの多くが政治家としての一面をもっていた。これらのことから、彼らは地域に社会的影響力を与えたに違いない。そして高山社分教場当主という経済力をもって緑野教会堂を設立し、緑野教会を維持したと考えられる。

大戸家および小泉家は有力な養蚕農家であり、高山社の分教場でもあった。またその婦人達は、地域や社会にでて様々な活動を行った。かかあ天下といえども、この当時は良妻賢母の考えが主流であり、なおかつキリスト教に対する差別や偏見も少なからずあつた時代に多方面にわたる活動を行うには、様々な障壁があり、相当のバイタリティが求められたのではないかと想像する。森岡(2005; p160)は「常識的な、ほどほどのところで妥協する人ではなく、非常識ともいえる目標を立て、それを妥協せずにやりぬく人、

『世間の忌憚を懼れざる所謂変人』でなければクリスチャンにはなれなかつたのである。」と記している。上記の人物達を「変人」と称するつもりは毛頭ないが、その多方面にわたる活動の根幹にあつたものは、まさにキリスト教の精神であつたのではないかと考えられる。

6. 養蚕地域の中のキリスト教会

大濱(1979; p124-146)は、前出の安中教会を田舎町教会、甘楽第一教会を農村教会と捉えて研究していたが、緑野教会も甘楽第一教会と同様、養蚕農家を中心とした農村教会であつたと考える。それをあらわすものが『上毛教界月報』に残されているので以下に引用する。

・藤岡教報

愈々養蚕の時期と相成り候故四月も下旬に至りてはあつまりの会衆も頗る減少いたし候日曜の礼拝も第四以後は朝を廃して夜にいたし申候

『上毛教界月報』第7号(明治32年5月15日)

・藤岡通信

養蚕時の真最中にて運動暫らく中止の姿となれり あつまりの出席数を云へば祈禱會にては 五日五人 十二日六人

『上毛教界月報』第8号(明治32年6月15日)

・藤岡教會六七月報

久しく養蠶の爲めに集り意の如くならざりしも六月後半より兎に角開く事とせり。(七月)三十日安息日午後二時第一回聖書研究会を開らく会するのは僅々六名八月には又々秋蚕期となれば茲一ヶ月間許りは十分の集りはなかるべしと思はる

『上毛教界月報』第10号(明治32年8月15日)

・藤岡教會八月報

本月は養蠶の爲めに中島栗須より出席せるものなく又當地方に於いて開會せる折なかりき唯一回一日の夜上栗須にて開きしのみ會衆十三名ありき

『上毛教界月報』第11号(明治32年9月15日)

元々養蚕業によって生計をたてていた人々にとって、キリスト教を受け入れる土壌は少なからずあつたにせよ、実生活を犠牲にしてまでもキリスト教活動に邁進する農民はなかなかいなかったのではないかと考えられる。一倉(1965; p78)が記しているように、「養蚕あるいは製糸のためにキリスト教の受容が有利であつたという一面があつたにしても、他の面からはまた余りにも多忙である養蚕のた

めに、教会の発展が著しく阻害されたといわねばならないのではなかろうか。」という解釈とともに、前出の隅谷(1968; p575)が記している「キリスト教会が基盤とした養蚕農家は、上層といっても多くは3、4町歩の小生産者層であり、地主的・寄生的な性格は極めて微弱で、日本資本主義の展開と結びついて、小商品生産を基底として上昇しつつあった社会層であった。」という解釈にたてば、養蚕期におけるキリスト教活動の減退は小生産者層の集まりである農村教会にとっては、致し方ないことだったのではないかと考えらえる。

そして養蚕農家が故のキリスト教活動における障壁をもう一つあげることができる。隅谷(1968; p568)は、「小農民の場合には共同体強制に抵抗することが困難であったし、使用人の場合には理解ある雇主の下を離れた時、困難が直ちに襲ってきた。たとえ本人は信仰をもって貫きえても、信仰が子供の世代に伝えられることは一層困難であった。」と記しており、具体的には「有力な農家が多いと記した緑野教会でも、原田庄三郎、栗原久三郎というような養蚕小農もおり、(中略)原田、栗原の場合にも、キリスト教は一代で絶えて了った。」と記している。また1903(明治36)年4月15日発行の『上毛教界月報第54号』によると、教会創設者の一人であった吉井の横尾佐十郎の子が大戸甚太郎の家を訪問した際、「氏は未懷疑の雲霧に掩はれつつあるを以て大戸吉永両姉は同氏の傳道に盡力し且つ同氏の為に祈禱會を開ひて神の恵を求めたり。」(上毛教界月報, 1903; p4)との記載がある。上記の通り原田庄三郎は緑野教会建設に尽力した人物の一人であり、横尾佐十郎は小泉信太郎と共に緑野教会で最も早く受洗した人物である。そのような熱心な信徒達も養蚕農家による共同体の中では、少なからぬ抑圧があったに違いない。

また養蚕地区のみならず社会的にみても、この当時はキリスト教への理解がまだまだ低い時代であった。森岡(2005; p158-159)は、安中教会において、信徒代表の稲川富次郎宅の放火、名望家松井十蔵への投石、そして室田町(現在の高崎市榛名町室田)初の受洗者である清水藤太郎は地域で孤立無視された例を記している。そして「信徒個人に対する迫害と見えるものも、実は老人子どもを含めて『キリスト教の家』への迫害であったことに注意したい。」と記している。

藤岡の地においても、1885(明治18)年10月に茂木平三郎が講義所を設立した頃から地域の反対運動があった。緑野教会創立百周年記念誌編纂委員会(1990; p72-74)によると、茂木は講義所を通六丁目と七丁目の間に在る北側の一家に設けたが、町民大に厭忌し、神官廣瀬志賀、氏子総代一人と役場に出頭して借家講義所を追立てることを求め

た。これに対し濱田は、「真理ある宗教は教へずして人之を信じ、妄誕のものは勉めて布教するも独り自然に衰滅に帰すべければ其儘に為し置くべし」と論説したという。しかしその後も反対運動が激しいため、1886(明治19)年6月には二丁目の白石蔵三郎の持家に講義所を移転している。翌1887(明治20)年1月22日には上毛伝道師会の演説会のため劇場を借りようとしたが、仏教徒の反対により劇場を使うことができず、旅店佐藤昌蔵宅にて演説会を開いた。

これらの記録により藤岡の地においても、人々の「耶蘇教」へ対する偏見は少なからずあったことを窺い知ることができる。前出の通り、養蚕を中心とする蚕糸業が盛んであったが故に、キリスト教が受容されていったという経緯は事実であるとしても、多くの養蚕農家が小生産者であったことによるキリスト教活動への影響、および地域社会に顕在したキリスト教とその信徒家族への迫害等により、他の地域・教会と同様、藤岡地域のキリスト教および緑野教会の創始期も、決して平穏な船出ではなかったと思われる。

結論

明治時代以前から群馬県は養蚕・蚕種製造・製糸および織物業が盛んな土壌であり、開国後に欧米諸国と蚕種や蚕糸等の取引によりキリスト教が持ち込まれ、それに関わる者等によってキリスト教活動が支えられた。また新島襄の影響により西毛地域を中心に多くの組合教会が設立された。その西毛地域は南三社を始めとして組合製糸が盛んな土地でもあった。

同様に西毛地域に属する藤岡には、組合教会に属した緑野教会があり、日本で最初の甲種高山社蚕業学校は組合方式により運営されていた。両者における組合の目的として、緑野教会も各養蚕農家も、それ単体では弱小であったために、それぞれが結合(=組合)する必要があったためではないかと考えられる。

高山社蚕業学校と緑野教会は少なからぬ人的交流があり、高山社蚕業学校の発展の柱の一つとなった分教場当主の中には、有力蚕種家や地域の政治家とともに緑野教会信徒もいた。緑野教会の創設期は、このような一部の上昇の生産者によって支えられていたのである。

しかし、信徒の多くが小生産者層の集まりである農村教会にとって、農繁期におけるキリスト教活動の減退や、子への非継承などの課題もあった。また時代もキリスト教への理解が浅く、他の教会と同様、緑野教会の創始期も苦難の時期であった。

- 注1:隅谷(1968)は、この数字は必ずしも正確ではないと記している。
- 注2:現在の緑野教会は安中教会などと同じ日本基督教団に属している。
- 注3:大戸甚太郎については、浦部正視(1976):多野藤岡地方誌各説編, p58 および、黒澤・飯塚(2004):ふるさと人ものがたり藤岡, 藤岡市, p28-29を参考にまとめた。
- 注4:小泉たねについての詳細は、拙著(2009):上州におけるキリスト教婦人の生涯—小泉たねと社会事業—, 唯木雅剛君追悼記念論集編集会(編), 雨にも負けず—唯木雅剛君追悼記念論集—, p71-88を参照。
- 注5:日向の幼名について『ふるさと人ものがたり藤岡』には角次郎とあるが、緑野教会の「信徒の受洗・転入会名簿」では日向角太郎と記載されており、角太郎を輝武の幼名であると捉えた。なお緑野教会の「信徒の受洗・転入会名簿」に記載されている受洗年月日と、『ふるさと人ものがたり藤岡』に記載されている「17歳のとき、当時6丁目にあった緑野教会で洗礼を受け」という記載が日向の生年月日と合っており、また『群馬県多野郡誌』でもその幼名を角太郎と記載している。

文献

- 相葉伸(編集者代表)(1971):小泉たね, 近代群馬の女性たち。みやま文庫, 前橋, p127-153.
- 藤岡一雄(2008):キリスト教。上毛新聞社(編), 群馬新百科事典。上毛新聞社, 前橋, p13-14.
- 萩原進・山田武磨(1955):概説篇。群馬県蚕糸業史編纂委員会(編), 群馬県蚕糸業史上巻。群馬県蚕糸業協会, 前橋, p1-38.
- 堀越一二三(1974):行政。In: 吉井町誌編さん委員会(編), 吉井町誌。吉井町, p721-774.
- 星野達雄(1987):星野光多と群馬のキリスト教。キリスト新聞社, 東京。
- 石渕保(1976):教育。In: 多野藤岡地方誌編集委員会(編), 多野藤岡地方誌総説編。多野藤岡地方誌編集委員会, 藤岡, p424-595.
- 石田和男(1973):高山社蚕業学校。In: 群馬県教育史研究編さん委員会(編), 群馬県教育史第2巻。群馬県教育委員会, 前橋, p634-640.
- 石田和男(1974):高山社蚕業学校。In: 群馬県教育史研究編さん委員会(編), 群馬県教育史第3巻。群馬県教育委員会, 前橋市, p528-541.
- 一倉喜好(1965):明治時代におけるキリスト教布教上の困難点一、二。群馬文化 78・79 合併号, 72-80.
- 柏木義円(編)(1899):上毛教界月報 7, 10.
- 柏木義円(編)(1899):上毛教界月報 8, 3.
- 柏木義円(編)(1899):上毛教界月報 10, 1-2.
- 柏木義円(編)(1899):上毛教界月報 11, 2.
- 柏木義円(編)(1902):上毛教界月報 48, 11.
- 柏木義円(編)(1903):上毛教界月報 54, 4.
- 加藤安雄・井草謹二・茂木近之助(1954):織物篇。In: 群馬県蚕糸業史編纂委員会(編), 群馬県蚕糸業史上巻。群馬県蚕糸業協会, 前橋, p323-475.
- 久布白落実(1973):廃娼ひとすじ。中央公論社, 東京。
- 工藤英一(1959):日本社会とプロテスタント伝道—明治初期プロテスタント史の社会経済史的考察。日本基督教団出版部, 東京。
- 黒澤明彦(1976):小野地区。In: 多野藤岡地方誌編集委員会(編), 多野藤岡地方誌各説編。多野藤岡地方誌編集委員会, 藤岡, p123-125.
- 黒澤明彦・飯塚壽男(2004):小泉信太郎。In: ふるさと人ものがたり藤岡。藤岡市, p20-21.
- 黒澤明彦・飯塚壽男(2004):大戸甚太郎。In: ふるさと人ものがたり藤岡。藤岡市, p28-29.
- 黒澤明彦・飯塚壽男(2004):大戸きし。In: ふるさと人ものがたり藤岡。藤岡市, p102-103.
- 丸山知良(1994):群馬のキリスト教。みやま文庫, 前橋。
- 緑野教会創立百周年記念誌編纂委員会(編)(1990):緑野教会百年の歩み。日本基督教団緑野教会, 藤岡。
- 宮野高明(1974):藩学と寺子屋。In: 吉井町誌編さん委員会(編), 吉井町誌。吉井町, p711-720.
- 森岡清美(2005):明治キリスト教会形成の社会史。東京大学出版会, 東京。
- 大濱徹也(1979):明治キリスト教会史の研究。吉川弘文館, 東京。
- 塩沢和夫(1982):小泉信太郎。In: 岡畏三郎他(編), 群馬県人名大事典。上毛新聞社, 前橋, p191.
- 隅谷三喜男(1968):群馬蚕糸業の展開とキリスト教—小生産者層の興隆と挫折—。In: 内田義彦・小林昇(編), 資本主義の思想構造。岩波書店, 東京, p561-582.
- 浦部正規(1976):藤岡地区。In: 多野藤岡地方誌編集委員会(編), 多野藤岡地方誌各説編。多野藤岡地方誌編集委員会, 藤岡, p58.

Relation between Christianity and Sericultural Industry of the Meiji Era in Gunma Prefecture, Fujioka District: Mainly the Midono Church and the Takayamasya Sericulture School

Motoyuki OGINO

School of Social Welfare, Tokyo University of Social Welfare (Isesaki Campus),
2020-1, San'o-cho, Isesaki-city, Gunma 372-0831, Japan

Abstract : The dealing of mainly silk yarn with USA and European countries was related to the expanding of Christianity to Gunma Prefecture in Meiji era. The union silk mill was active in this region. Furthermore, many union churches were established under the influence of Jo Nijima in the western region of Gunma Prefecture. There was the Midono church that belonged to the union church in the Fujioka district, Gunma Prefecture. The union also conducted the Takayamasya sericulture school, and there were a few exchanges of people between church and the school. In powerful owners of silk yarn production, there were Christians as well as the politician, and they not only patronized the Takayamasya-bunkyojo(a small branch school)but also supported the Midono church. However, during the foundation period, many reasons such as a decline in the Christianity activity at the farming season, poor understanding the Christianity in the farm village where a lot of Christians were belonged to the comparatively smaller production, etc. made a difficult to manage the church in the rural regions, like the foundation period of Midono church. The purpose of the present research was to investigate the Takayamasya sericulture school, especially the Takayamasya-bunkyojo supported by the people who were also main patrons of the Midono church at the foundation period, on the basis of literature study.

(Reprint request should be sent to Motoyuki Ogino)

Key words : Union church, Union silk, Midono church, Takayamasya sericulture school, Bunkyojo

